

## 天にある宝

マタイ 6:19~24

**導入** みなさんは「宝」というと何を思い浮かべますでしょうか。国語辞典を引いてみましたところ、第一の定義として書かれているのは、「世の中に数が少なく、きわめて（高価で）大切な品物」という意味でした。それは、だれの人から見ても貴重であり、高価で、価値がある、いわゆる「宝物（ほうもつ）」という意味ですね。それに対して、辞書で2番目に挙げられていた定義は、「ある人にとって、他にかけがえのない、大切なもの、あるいは大切なこと」というものでした。たとえ、他の人から見れば、とるに足りないようなものであっても、ある人にとっては、それが大切な「たからもの」であるということがあります。それは必ずしも、品物や物品ではなくて、かけがえのない思い出であったり、大切な誰か、あるいはその人たちと過ごす時間であったりと形の無いものかもしれません。辞書の2つ目の定義は、そういう意味での「宝物」です。

今の大学生たちは、ちょっと知らないかもしれませんが、昔、こんなCMがありました。いろんなバージョンがありましたが、その一つを今から紹介しますので何のCMか考えてみてください。

登場するのは、小学生くらいの息子とはじめて一緒に釣りに行くお父さん。そのお父さんの心の思いを描いたCMになっています。最初は、お店で釣り竿を買うシーン。そこにナレーションが入ります。「はじめての釣り竿〇〇円」。次のシーンは、その釣竿を持った子供が、どこかぎこちなく川の浅瀬に一步步入っていくシーンです。お父さんは先に川に入っていて、子供が釣り竿を持っていない方の手をしっかりとつかんで引いています。そこでナレーションが入ります。「ちょっと大きめの長靴〇〇円」。そのあと、二人並んで川釣りを楽しんでいる場面では「おそろいのベスト〇〇円」。最後に、魚を釣り上げて嬉しそうな子供の笑顔をバックに、「釣り仲間ができた日：priceless」。もうお分かりですかね。そして、CMはこう締めくくります「お金で買えない価値がある」「買えるものは〇〇カードで」。

このCMでは「宝」とか「宝物」という言葉は出てきませんでしたが、このお父さんにとって、新しい釣り仲間である息子と過ごす時間、息子との思い出、それが、お金では買えない、値段を付けられない、かけがえのない「宝物」なのでした。

**本論1 地上の宝と天の宝** 今朝のみことばで、聖書は、「自分の宝」を地上にたくわえるのはやめて、天にたくわえるようにと勧めています。「自分の宝」とありますから、ここで問題になっているのは一般的な意味の「お宝」ではなく、みなさん一人一人にとって大切なもの、大切にしていることです。みなさんにとっての大切な宝とは何でしょうか。

今朝のみことばは先ずその「自分の宝」を「地上にたくわえるのはやめなさい。」と勧めています。「そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗んでしまうと、その理由についても語っています。地上にたくわえられる宝は、いつか朽ちてしまいます。また、傷がつき、壊れ、駄目になってしまいます。あげくは盗まれて、無くなってしまうこともあります。あるいは「死」によって奪われるという言い方もできるかもしれません。地上の生涯を終えるとき、私たちはその宝を持っていくことはできません。地上に属する宝は、私たちの掌からすり抜け、盗まれたかのように何も残らないのです。

それに対して、天にたくわえられた宝はどうでしょうか。地上の宝とは正反対に、「そこ（天）では、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」とみことばは語っています。「天」と「地」が引き合いに出されるとき、そこで意識されているのは、単なる場所の違いではなく、「天」と「地」とがはまったく性質が異なる場所であるということです。ですから、そのどちらに自分の宝をたくわえるのかという問題は、実は「宝」の「質」を問題にしているともいえます。あなたは地上に属する宝を蓄えようとしているのか、それとも天に属する宝をたくわえようとしているのか、それが問われています。つまり、私たちが何を「宝」とするかという問題です。

私たちは、何を「宝」としていけばよいのでしょうか。どのようなものが「天」にたくわえることがで

きる「宝」なののでしょうか。今日の箇所では、それらが具体的に示されているわけではありませんが、イエス様が続けて語られたことをみていくなら、それが私たちの「心の在り方」と関係があることが分かります。

**本論2 私たちの心・関心の向けられるところ** イエス様はこう続けています。「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」確かに、「宝」というのは、その人にとって大切なもの、かけがえのないものであるわけですから、その人の心、その人の思いもそこにあるはずです。「宝」というからには、何らかの思い入れがあるものです。他の人にとってとるに足りないようなものが、ある人にとって「宝」となっていくのは、その人の心がそれに向けられ、いろいろな思いがこめられ、特別な価値をそこに見出していくからです。

はじめにお話したCMのお父さんが、たまたま釣りに出かけた先で出会った少年が、新品の釣り竿と長靴で、偶然自分と同じベストを着ていたとしても、おそらくそれだけでは「宝」のような、かけがえのない priceless な時間だったとは、お父さんはきっと言わないでしょう。そこにはお父さんの思い入れがないからですね。一緒に釣りができるまでに成長した息子の姿には、お父さんのたくさんの思いが詰まっています。そこに、また一つ新しい経験を共有する喜びが加わる、そんな今しかできない瞬間であるというお父さんの思いがあるから、そのお父さんにとってかけがえのない時間となったわけです。

何を「宝」とするのか、どのような宝をたくわえていくのかということは、その人の心の在り方と切り離しては考えられません。私たちの心が、何を見つめ、何を尊いと考えていくのか、それが私たちの「宝」を決めていきます。

そして、その心の在り方に気を配るようにと主イエスは言われているのです。「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」この言葉は、理由を説明している言葉です。つまり、主イエスは、「あなたの宝のあるところにあなたの心もある。だから、自分の宝を地上ではなく、天にたくわえなさい。」と言われたわけです。私たちにとって大切に、かけがえのない「宝」は、私たちの心をひきつけます。私たちにとって魅力的なものです。気を付けていないと、「心」と「宝」の逆転が起こりえます。私たちの思いが宝をたくわえるのではなく、反対に「宝」があるところに、私たちの思いが捕らわれてしまいかねません。そして、意外と自分自身の心がどこに向いているかということに私たちは無自覚で、自分でも気づいていないことがあるのではないのでしょうか。今私が宝としているものは、何か。それを考えてみれば、私の心がどこにあるか、何に向けられているのかもわかるでしょう。「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」という主イエスの言葉は、心のあり気を配るようにとも教えてくれています。

**本論3 心の在り方、身体の灯り、罪の問題** ところで、人間は何故、朽ちることのない天の宝ではなく、「地上」の宝に心を惹かれ、それをたくわえようとしてしまうのでしょうか。どう考えても、朽ちてしまうことも、盗まれることもない「天の宝」をたくわえた方が良いのではないのでしょうか。

たとえば、地上の宝を過大評価しすぎてしまうと、天の宝の本当の価値をわかっていないなどとあれこれと理由を考えることができると思いますが、そこには人間の持っている「罪」の問題が関係しています。私たちは「罪」によって真理が見えなくなっているために、一時的で空しい地上の宝を求めてしまうのです。

22節を見てみましょう。「22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るい、23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。」 「からだのあかりは目」なのですが、人の目は「罪」によって曇っていると、聖書は教えています。この22、23節で言われている「暗さ」とは、「罪」持っている「暗闇」の性質です。人が生まれながらに持っている暗闇の性質、心の闇とでも言うべきものでしょ

う。

そして聖書は、その暗闇を誰もが抱えており、すべての人が「罪」のもとにあるのだと教えています。

異邦人伝道に大きく用いられ、使徒ともよばれたパウロも例外ではありません。パウロもまた、自分自身に目を向け内面を探ってみたとき、次のように言わざるを得ませんでした。ローマ7：15「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」そして「私は、ほんとうに惨めな人間です。」(7：24)とまで言いました。良いことをしたいと願っていても、それをなすことができない人間の悲しい現実がここにはあります。

しかし、その後パウロが自分自身ではなく、イエス・キリストに目を向け、神に心を向けたとき、その思いは変えられ、遂には、「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後にくるものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」と告白するに至りました。「私はこう確信しています！」と大胆に言う者へと変えられました。

**本論4 世の光であるキリスト** 愛するみなさん、暗闇を解消する方法は、ただ一つです。それは、光を照らすことです。その光とは何でしょうか。パウロの心に変化をもたらしたのは、自分自身を見つめることを止めたときでした。そして、主イエス・キリストに目を向け、父なる神に思いを向けたときでした。自分の心のうちにある暗闇は、イエス・キリストを見つめたときに晴れていくのでした。

聖書は、主イエスは「すべての人を照らすまことの光」としてこの世に来られたと、ハッキリと教えています。ここに福音があります。私たちへの良き知らせがあります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」このヨハネ3：16節は、よく聖書の中心的なメッセージとして挙げられるみことばです。聖書は、すべての人が罪人であると教えていますが、それでは終わらない！のです。その罪ある人間を神はあわれみ、変わらない愛で愛しつづけ、そして救いの道を開いて下さったのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」それゆえ、暗闇の中で右往左往し、互いに傷つけあい、憎みあっていた人間のもとに、「すべての人を照らすまことの光」である、主イエス・キリストをこの世界に送って下さいました。そこに神の愛があります。

主イエスも、私たちのために天から降り、人となってこの世界に来て下さいました。あらゆる栄光を捨てられました。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。」(ペリピ2：6, 7)とペリピ書にあります。さらには「自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」(ペリピ2：8)とさえ述べていますが、主イエスは、その十字架の苦しみの道を、私たちのために喜んで、その身に引き受けて下さったのです。「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」(ヘブル12：2)

こうして主イエスは、私たちに照らす「光」となって下さり、わたしたちの命となって下さり、私たちがこの世界を造られたまことの神のもとに招き、神の子どもとなる道を開いて下さいました。罪ある私たちを、神様は招き、そして驚くべきことに「神の子」として下さるのです。

旧約時代、神様がイスラエルの民をご自分の民として選ばれたとき、神様は「イスラエルを選んでご自分の宝の民と(された)」(申命記7：6)されました。そうであるならば、神さまが私たちをご自分の子供として下さるといふとき、その「神の子」とは、神様にとってかけがえのない「宝の子」でなくて何でしょうか。神様は、私たち一人一人を「宝」として下さっているのです。このことを、今日はぜひ心に留めていただきたいと思います。あなた自身も、そしてあなたの隣にいる一人一人の人たちも、神は「宝」のように大切に思い、失われることがないようにと願っておられます。人に与えられた「光」であ

る御子イエス・キリストを信じて、永遠の命を得て欲しいと願ってくださっています。主イエスもそのために命をさしだし、私たちの命となってくださったのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」この有名なみことばの続きにも、今朝は、目を留めましょう。「17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」ここでも、御子イエス・キリストが「光」であることが鮮やかに示されています。そしてまた、聖書が語る「罪」の姿が浮き彫りになっています。

18 節に「神のひとり子の御名をを信じない者はすでにさばかれています。」とあります。聖書の語る「罪」とは、「光」である御子イエス・キリストを受け入れないことです。「光」が与えられているのに、その「光」のもとに来ずに、暗闇に留まり続けることです。救い主として私たちに与えられたイエス・キリストを受け入れず、主イエスを否定することです。それは、御子を遣わしてくださった父なる神の愛を受け入れないことを意味します。もし人が、「わたしには、神もキリストも必要ない」、「わたしはわたしの思うように、自由に生きよう。」と言うのなら、その人は「あなたはわたしにとって高価な宝である」と言っている神様の愛を無視して、実は自分が深い暗闇の中を歩んでいるのだと言わざるを得ません。

からだのあかりである目が、闇ではなく光を見て、その光をとり入れるなら、「全身が明るく」なりますが、「もし、目が悪ければ、全身が暗いままで。その暗さはどんなでしょうか」人が心に宿している暗闇は、神様が与えてくださる「光」をとり入れない限り暗闇のままです。その暗闇は、本当に大切なものが見えなくさせ、何が真理であるのかを分からなくします。その暗闇を打ち破るのは、ただ「すべての人を照らすまことの光」であるイエス・キリストのみです。このお方こそが、私たちに力を与え、命を与え、私たちのすべてとなってくださるお方です。

**結論** 最後に、24節のみことばを見ていきましょう。

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

二人の主人とは、ここでは「神」と「富」と言われています。「神」か「富」かどちらか一方にしか、私たちは仕えることができないものだとされています。私たちは、どちらに仕える者でしょうか。私たちは、「神」と「富」のどちらに、私たち自身をささげているのでしょうか。あるいは「神」と「富」のどちらに依り頼んでいるのでしょうか。もしも「富」に仕える道を選ぶならどうなるのでしょうか。「富」は一見豊かさをもたらし、安定をもたらしてくれるかのように思えますが、それによってもたらされるのはかえって「富」が失われ、尽きてしまうことへの「心配」なのではないでしょうか。今日のみことばの続きの箇所では、そのことが扱われています。しかし、私たちに必要なことをすべてご存じである神に仕え、神により頼んで生きるなら、明日のための心配は無用です。

私たちに日々ののちを与えてくださり、内側からつくりかえてくださるお方、すべてに満ちあふれておられ、変わらぬ愛をもって私たちに臨んでくださるお方に信頼して歩むことができることこそ、私たちの本当の「宝」です。この神様との愛の交わり、そして神が大切にしておられる周りの人々との交わりに生き、互いに愛し合うこと、それが天に宝を積むこととなります。どうか今週も、この生ける真の神である、私たちの主に信頼し、神を愛する者として歩んでまいりましょう。お祈りいたしましょう。